

協同の系譜

⑥

第1部 川崎 平右衛門

農民の納得と協力

治水への感謝 今なお

寛延2(1749)年に美濃国本巣郡本田陣屋に支配替えになった川崎平右衛門は、長良川の水勢を緩和するために開削された大樽川(おおくわがわ)が、かえって揖斐川筋や大樽川流域に洪水を引き起こしていることに対処するため、反対する長良川側の農民との利害調整に腐心しながら、大樽川食違堰(くいちがえぜき)を完成させた。しかし、宝暦3(1753)年夏に大洪水が発生。根本的な問題解決のため薩摩藩に御手伝普請が命じられ、宝暦4(1754)年2月から宝暦5(1755)年5月にかけて三川分流工事が行われた。この最重要ポイントは、長良川が揖斐川に合流する大樽川と、木曽川と揖斐川の合流地点である油島で、大樽川には平右衛門による食違堰とは別に薩摩洗堰(あらいぜき)が設けられ、油島では堤防(きさき)が設けられ、締め切り工事が行われた。

費用40万両の大工事

この薩摩藩負担による御手伝普請は、目標をほぼ完全に近づけて実現したものであったが、当初予定されていた工事費8万両が最終的には40万両にまで膨れ上がった空前の大工事であった。当時、藩財政は66万両の借財を抱える中、まさに「薩摩藩の血脈(みずみず)」に由つて工事費は賄われた。そこで、工事費は贈り金(あづれき)が絶

られ、幕府への怨念は強く、明治維新にも少なからざる影響をもたらしたとされる。

幕府が見放すも続行

この宝暦治水事件が行われる間、平右衛門は薩摩藩による工事とは別途、逆水留閘門(ぎやくすいどめこもんひ)の建設に奔走することになる。上流

が民主的であり、農民の納得感を得てその協力の下に遂行された。しかし、工事費が予定

外に膨らみ、幕府から見放され

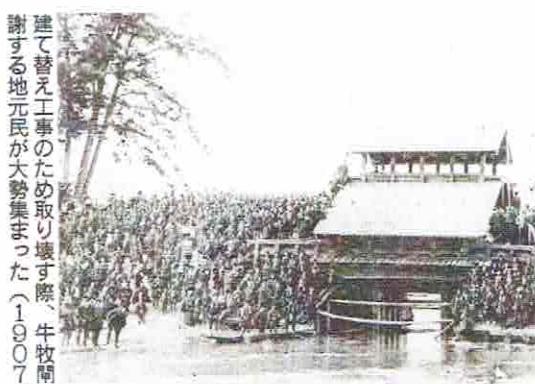
る状態となつたが、初志を貫き、農民も平右衛門を信頼し、工事完成を望む農家を軒々と

し、寄食をしながら工事を続行

した」と伝えられている。

また、平右衛門は治水工事に当たっては、広域での対処が肝心であり、互いに痛みを分かち合いながら、あくまで公益を優先して事を運んでいくことを基準とした。こうした平右衛門の働きと人情をたたえて穂積町(現瑞穂市)には川崎神社が建てられるなど、もに、興禪寺では今日に至るまで平右衛門の命日には法事が続

農的・社会デザイン研究所代表 蔴谷 栄一



建て替え工事のため取り壊す際、牛牧閘門に感謝する地元民が大勢集まつた(1907年)

構想し、牛牧輪中の村方を説得して請願を繰り返させたところ、この牛牧閘門は、とも呼ばれる五六川の逆水留閘門(ぎやくすいどめこもんひ)と構築され、この牛牧閘門が建成される。この牛牧閘門は、本スタンスとした。これは平右衛門が